

# 素晴らしい出会いに感謝し成長し続けること



## 松永行子

東京大学生産技術研究所  
[153-8505]東京都目黒区駒場4-6-1  
特任講師, 博士(工学).  
専門は組織工学, バイオマテリアル.  
mat@iis.u-tokyo.ac.jp  
www.matlab.iis.u-tokyo.ac.jp/

学位を取得して6年、これまでの研究生活を振り返ると、仕事で繁忙になることもありました。全体としては、プライベートとのバランスを保ってうまくやっていたのではないかと思います。そのような中で、多方面の方々と出会い、節目節目で仕事の枠を超えたアドバイスを頂戴しながら、研究者としてなんとかここまでやってきたというのが正直な印象です。

当時修士課程の学生であった私は、所属先の東京女子医大において、細胞シートで治療を行う組織工学・再生医療研究に大変興味をもっていました。当時、研究室の博士課程の先輩方は雲の上のような存在で、「私みたいな学生が博士課程に行ってもいいのかな?」とっていました。ところが、修士2年の秋ぐらいに、外部の先生方から「博士課程へ進学しないの?」と言われたことがきっかけで、進学を真剣に考えるようになり、結果、博士課程へ進学することになりました。その際、相談に乗ってくださった、また、ご支援くださった多くの先生方には心から感謝しております。さらに、学部、修士時代に論文執筆や、国際会議での発表を経験させていただいたことが、進学を決断する際の自信につながったと思います。

その後、同級生・後輩達が次々と就職し、社会で新しい生活をスタートしていることを羨ましいな、と思いつつも、私が経験した博士課程は、修士課程よりもさらに深みのあるものでした。具体的には、多くの大学・企業研究者と出会い、自由にのびのびと研究をする機会、また、海外留学の経験をさせていただくなど、素晴らしいものでした。100%博士課程へ進学してよかったと感じています。このように研究者としての道を選んだわけですが、実際の生活は研究をベースにしつ

つも多様な経験をすることができました。大学という一見閉鎖的な空間に見える場所ですが、実はいろいろな人と会うことができます。何よりも、大学・研究所という場所は、学問に対する追求、探究心から人が集まる場所なので本当に楽しく、好奇心が旺盛な人々とともに時間を共有できることに私は心から感謝しています。

研究と家庭については、時には家事に追われ、また、仕事を家庭に持ち込みつつも、なんとかうまくやっていたのではないかと思います。学会の発表や原稿の締め切りが近づいた際には、帰宅が遅くなったり、仕事を家庭に持ち込んだりしますが、夫も修士課程までは大学の研究室で研究をしていましたので、その辺りの理解はあるようです。お互い、譲り合いながらも、自分のやりたいことをうまく貫いてきたのではないかと思います。また、博士課程時代の留学先のメンター(ボストン大・Joyce Y. Wong先生)、さらに、学位取得後に過ごした研究室のメンター(東大生産研・竹内昌治先生)、それぞれの若手P.I.の元で研究をさせていただいたことも、仕事と家庭とを両立するうえで大変参考にさせていただきました。どちらの先生も、仕事と家庭との両立について身をもって示してくださり、お手本になる方々が周りにいたことも大変幸運でした。

最後に、私が頑張ることができる原動力は、私を取り巻く周りの人達だと常に感じています。頑張っている研究室のメンバー、学会で会う同僚、先生方は私の精神的な支えとなっています。自らを新しい環境におき、新しい経験を通して、変化を恐れず日々成長していきたいと思っています。